支援機器等教材活用実践事例フォーマット

実践年度・タイトル		平成 30 年度 「ぼく」と「みんな」をつなぐおしゃべりツール
授業について	教科名等	□国語　□社会　□算数/数学　□理科　□生活　□音楽　□図画工作/美術　□家庭/技術・家庭　□体育/保健体育 □特別の教科　道徳　□外国語/外国語活動　□総合的な学習の時間　■特別活動　■自立活動　■各教科等を合わせた指導 □その他の教科　■その他（学校生活全般）
	単元・題材名	日常生活「朝のあつまり」 集会行事
	授業の目標	①音声ペンやタブレットなどのコミュニケーションツールを使って、友達や教員に働きかける。 ②周囲に働きかける役割（係、司会）に、一人で取り組む。
	学力の3要素	■「知識及び技能」 ■「思考力・判断力・表現力等」 ■「主体的に学習に取り組む態度」
学習集団と子供の実態	学校・学部・学年・人数	□通常の学級　□通級による指導　□特別支援学級　■特別支援学校 □就学前　■小学生　□中学生　□高校生以降 □特定されない 小学部3・4年　8人
	対象の障害	□視覚障害　□聴覚障害　■知的障害　□肢体不自由　■病弱・身体虚弱　□言語障害　■自閉症 □情緒障害　□LD（学習障害）　□ADHD（注意欠陥/多動性障害）　■その他（ダウン症）
	子供の困難さ	□見ること　□聞くこと　■話すこと　□読むこと　□書くこと　□動くこと　■コミュニケーションをすること　□気持ちを表現すること □落ち着くこと・集中すること　□概念（時間、大きさ等）を理解すること　□学習（計算、推論等）すること　□その他 小学部3年に在籍する、自閉症スペクトラムおよび知的障害のある男児。 SM社会生活能力検査　SQ:32（CA:8-7、SA:2-9） 発語はなく、「あー」と声を上げたり、指さしやトイレなどサインでの表出が見られる。思い通りにならないことがあると、急に大きな声を上げたり泣き出したりすることがあり、原因は明らかではないものの体調や不安な場面になると嘔吐をすることが多くあった。
支援機器等教材の活用について	活用の意図	Aコミュニケーション支援（■A1意思伝達支援　□A2遠隔コミュニケーション支援） B活動支援（■B1情報入手支援　□B2機器操作支援　□B3時間支援） C学習支援（□C1教科学習支援　■C2認知発達支援　■C3社会生活支援） D実態把握支援（□D1実態把握支援） 〇音声ペン（Gridmark Inc.）を使用して友達に呼び掛けたり、会の全体進行をしたりする。 〇日常的にiPod touch（Apple Inc.）を携帯し、DropTalk（HMDT Co., Ltd.）を使用して友達や教員に働きかける。
	使用した支援機器等教材の名称と画像	〇音声ペン（Gridmark Inc.） 〇iPod touch（Apple Inc.） 〇アプリ：DropTalk（HMDT Co., Ltd.） あつまりでの役割
授業展開	授業展開・支援の手立て	〇「あつまり」 「出席」場面で、教員の名前を呼ぶ友達を尋ね、挙手した友達から選んで、iPod touch(DropTalk)で指名する役割に取り組んだ。 教員が一度モデルを示すとすぐに理解し、一人で役割ができるようになった。また、「姿勢のいい人」など指名するポイントを伝えると、該当する友達を選んで指名することができた。 友達が返事をすると、飛び跳ねながら笑顔で喜ぶ様子が見られた。 〇「集会行事」 実習生とのお別れ会や、学部でのお楽しみ会で、司会の役割に取り組んだ。前面や側面にモニターを置き、次第ごとにスライドを提示することで、それを見ながら手元の司会カードをめくり音声ペンで読み上げることができた。 ツールを渡すだけで使い方を理解し、周りの状況を見ながら次のプログラムをアナウンスすることができ、本人も自信をもって行っている様子が窺えた。
効果・評価	子供の様子や変容 および授業の評価	対象児童は言語の理解があるが表出方法が未獲得だったため、要求や不安を伝えることに困難があったが、ツールを使用することにより、教員や友達とのやりとりやリーダーなどの役割に積極的に取り組めるようになった。また、ツールを活用し、伝わるやりとりを経験することにより、音声を発しようとする姿が多く見られるようになった。 音声言語での表出を目指す児童においても、子どもが「今」自分の意思を表出できる手段を提供することで、それを基に知識や人間関係を拡げ、生活の質を高めることができる。そこからさらに、様々な表出のレパートリーの獲得につなげていけるのではないかと考える。